《研究部会報》

『寛永二十年版本 萬葉集』の谷川士清と蓬莱尚賢の書き入れについて

片山　武

津市図書館蔵の特殊文庫の一つ橋本文庫に所蔵せられている寛永二十年刊行の『萬葉集』は、20巻20冊全巻にわたり墨・朱筆の書き入れが見られる。

20巻の奥の識語によるに、樋口宗武のもとにある万葉集（契沖、今井似閑の書き入れたもの）を借り出し先学の書き入れをそのまま写した。そこにさらに「清按（せいあんするに）…」として士清自身の見解も加えた。さらに書陵部蔵のものは射和文庫の旧蔵書で、１冊目の表紙の書き入れなどにより士清の書き入れが見られるものがある。

津市図書館の中川豊氏は、書陵部蔵本は転写本であろうとされる。

巻一の「萬葉集第一奥書」の部分に尚賢の名が見られるにより、先学の書き入れをそのまま写した上に、士清の女婿蓬莱尚賢の書き入れは青筆によって書き加えられたとわかる。墨筆・朱書で書き入れた士清は、自分の意見を加えたものを尚賢に渡す。尚賢は墨筆・朱書と区別する意味で青筆で書いたというわけである。さらにもう一本の転写本は射和（いざわ）の竹川家ゆかりの人の手もとにわたった。それをだれかが青筆を加えたといえよう。

巻一・七歌を例に見るに、題詞「額田王」のところに墨で王の系譜を加えた。ヌカタと青筆で書く。未詳のところにも墨筆で未詳としたわけを書く。青筆は未詳を囲って左に「可削」としている。尚賢は士清の書き入れを一応認め、士清のふれていない点、士清の説に従えないところを書いたものか。以下今後も順次検討してみたい。〔以上５／16（土）、７／11（土）、８／22（土）三回分の略抄まとめ〕

（参考）巻一・七番の歌　寛永二十年版本は次のごとくである。

天武天皇夫人十市女王母額田姫王是歟鎌王又鏡王女官本　（これは墨筆）

額田王歌　　未詳　皇極天皇ノ時額田王ノ歌トキヽテ明日香河原宮ト標メ載タレトモ
歌林ニ異説アルニヨリ未詳ト注シテサテ歌林ヲ引也　（以上は墨筆）

金（アキノ）　野（ノ）　乃（ノ）　美（ミ）　草（クサ）　苅（カリ）　葺（フキ）　屋（ヤ）　杼（ド）　禮（レ）　里（リ）　之（シ）　兎（ウ）　道（チ）　乃（ノ）　宮（ミヤ）　子（コ）　能（ノ）

宿リスル比良ノ都ノ刈庵ニ尾花ミタレテ秋風ソ吹　右大弁光俊　是ハ近江比良内ノ都ノ説ヲ用〇仁徳紀云兎道稚郎子與宮室於兎道而居之　山城風土記曰謂宇治者軽嶋明宮御宇天皇之子若郎子造桐原日桁宮以為宮室因御名號宇治本名曰許乃国矣昔住シ人ノ涙ヤ露ナラン世ヲ宇治山ノ秋ノ花ソノ　慈鎮白露ニ散ヤ過ナンヲ山城ノ宇治ノ都ノ秋ハギノ花　衣笠内府　是ハ山城宇治ヲ用ユ

借（カリ）　五　百　磯（イソ）　所（オモフ）　念

（下線部の磯の字は寛永20年版本では火偏のイソの字）

（漢字仮名交じりで書き下すと）秋の野のみ草刈り葺き宿れりし宇治の宮処の仮廬しそおもふ

さて、他に墨書の書き入れも多々あるが省略し、尚賢の青筆の部分を指摘しておく。

＊　題詞　　額田王歌（ヌカタ）の　ヌカタのふりがな

＊　未詳をかこって　可削　借五百磯　の五百の右に「廬」の字

＊　左注の中で、①山上憶良大夫　の大夫の右に「マウチキミ」のふりがな、検……歌林の一・二点、一書戊申の書の左下に日と「日」を補っている。②五年春正月の春の右下に正月巳(己)卯朔辛巳の朔の右下に〇を補っている。③天皇幸近江之平浦　一書の左下につけた一・二点。

＊　上欄には「按皇極朝無戊申然則此説不足取」とある。「戊申の年」は36代孝徳天皇の大化４年（648）。額田王の歌は皇極上皇の御製との説もあるが、孝徳天皇の御製と見る説もあり、作歌年代未詳という意味で、「未詳」の注記がある。　（以下略）

（平成22年度勉強会予告）

日時：（５月～８月）第３土曜日10時～　　会場未定
内容：『倭訓栞』の中の万葉歌について（４回か）
講師：片山　武氏（谷川士清の会会員）